異婚

検校庵だより 10

新年のご挨拶

検校庵 住職　鈴木 恵道

新年明けましておめでとうございます。令和七年の新春を迎え、心よりお慶び申し上げます。

令和六年元旦に発生した能登半島地震には大変驚きました。被害に遭われた皆様に、心からお見舞い申し上げます。

震災の知らせを受け、三月に涅槃会法要に合わせて防災講座を開催いたしました。

災害対策には、自分自身で備える「自助（一人一人の役割）」、地域で助け合う「共助（地域の役割）」、行政が行う「公助（行政の役割）」の三つがありますが、まずは自分や家族の命を守ることが大切です。

安きに居りて危うきを思う
思えば則ち備えあり
備えあれば患い無し

『春秋左氏伝』より

最後の一行だけがことわざとして知られていますが、防災士の方によれば、前半二行にある「普段から危険なことを知って備えておく」ことが重要だと伺いました。

検校庵の場合、土砂災害が考えられますし、上川沿いの方は水害に備えることが必要です。

副住職が始めた取り組みについて、チラシをご覧いただき、ご検討いただければ幸いです。

檀信徒皆様のご清祥を心よりお祈り申し上げ、年頭のご挨拶とさせて頂きます。

ソナエルセットのご紹介　藤田清隆

令和六年十二月より、法事向けのお供物「ソナエルセット（非常食の詰め合わせ）」の販売を始めました。

「仏さまのお下がりで災害に備える」という趣旨の商品であり、東日本大震災を経験した福島県出身の和尚として、宗教活動を通した防災啓発活動を行うことを目的とします。

「ソナエルセット」は三食×三日分の非常食を詰め合わせたお供え物であり、次の特徴があります。

◆非常食は全て「賞味期限が製造日より五年以上」の長期常温保存品を採用

◆防災マニュアルと栄養バランスを考えた献立表が付属

◆賞味期限が切れる前にお寺からお知らせが届く

災害に備えることが必要なことは誰もが知っているものの、長期保存が可能な非常食は地元のスーパーで気軽に購入できるものではありません。

法事のお供え物として「ソナエルセット」を購入していただくことで、仏さまに守られながら穏やかな心持ちで日々をお過ごしください。

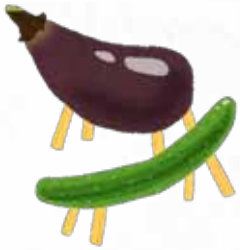
賞味期限が近付いた頃、お寺から届いたお知らせを受けて、自ら消費または一部でも食料寄付を検討頂きたいと思います。

※詳細は申込書をご確認下さい

令和七年の行事予定

3月15日「涅槃会（ねはんえ）」10時半

お釈迦様の亡くなられた日に、そのご遺徳を偲ぶ法要。”やしょうま”を準備してお待ちしております。



7月8日「施食会（せじきえ）」10時半

お盆の先祖供養と、新盆のご供養をする法要。（お施餓鬼とも呼ばれます）共にご先祖様へ掌を合わせましょう。

※当日よりお盆までフードドライブ開催予定

4月15日「検校祭（けんぎょうさい）」11時

検校尊像の供養とお釈迦さまの誕生をお祝いする法要。「花祭り」を共にお祝いしましょう。

12月6日「成道会（じょうどうえ）」15時

お釈迦さまのお悟りをお祝いする法要。悟りに因んだお粥をお配りしております。

どなたでもご参加いただけます。
法要を通して、仏の教えに触れてみませんか。

お寺をご利用ください

検校庵では、ご法事・通夜・お葬式・会食・勉強会・花見などの各種行事に昔からご利用いただいております。

お檀家さま・信者さまに限らず地域の方々に幅広くご利用いただくことが出来ますので、お気軽にお問い合わせください。

◆法事年回表とご先祖様の命日を見比べて、年回忌に当たっているかをご確認ください

◆土・日・祝日にご法事を希望される場合、お早めにご連絡をお願いします

◆本堂でのご法事・会食も可能ですので、是非ご利用ください

令和７年　法事年回表

１周忌	令和	６年	亡
３回忌	令和	５年	亡
７回忌	令和	元年	亡
	平成	３１年	亡
１３回忌	平成	２５年	亡
１７回忌	平成	２１年	亡
２３回忌	平成	１５年	亡
２７回忌	平成	１１年	亡
３３回忌	平成	５年	亡
５０回忌	昭和	５１年	亡
100回忌	大正	１５年	亡

副住職コラム

どう生きるか

藤田 清隆

いのちありのままに生きることの、なんと避けがたくも有難い、知足の一大事であることか。

これは、能登半島地震によりお寺が倒壊された市堀玉宗老師がお示しされた言葉です。

「知足」とは「足るを知る」ということ。

釈迦入滅最後の説法、遺教経の中で語られた、今を生きる私どもが実践すべき八つの教え「八大人覚」のひとつであり、「自分がいま持っているもののありがたみを知る」ということです。

老師はさらに続けます。

明日知りえぬいのちながらの輝きがある。自己の灯明を照らして今を超えていこう。

お釈迦さま最後の説法は「自灯明 法灯明」と呼ばれる教えです。

自らを灯火とし、自らを拠り所としなさい、法の教えを灯火とし、拠り所にしなさい。

他の教えを拠り所とせず、自らの心を修めることである、と弟子に伝えました。

自らの人生、他人任せで歩めるはずがありません。

自らと向き合い、欲に任せて自分を見失わず、辛いことから逃避せずに向き合う。

そして、正しく心を観察することで、常に心が満たされると説かれております。

被災された方々は、復興を志す生活の中で、震災前の生活を振り返るとき、大きな喪失感を感じざるを得ない状況であろうかと想像します。

しかし、老師の言葉からは力強い思いが伝わってきます。

震災前の過去を追い求めることで起こる喪失感など幻想である。目の前の現実こそが、今の自分に起こっている一大事である。

全てを失ってもなお、能登で生かされているこの命、この身体こそが、諸行無常の中で自分がいま持っているものの全てであり、明日生きるか死ぬかも分からぬ世界に身を置いている現実そのものである。

このことに改めて気づかされ、自らの命の輝きに喜びすら感じている。自らを灯として、自らと向き合い、仏の教えを拠り所としてこの苦境を乗り越えるぞ、と仰っているのです。

検校庵だよりの表紙を飾った「負けてたまるか!!」の文字は、老師からの力強いメッセージであり、能登復興・輪島再生の為に奔走されております。

私事ですが、令和六年十月に祖母が享年九十四歳で亡くなりました。

病院にお見舞いに行った際、「早く死にたいのに死ねない。苦しくても生きているのだから、まだ死んではいられないね、ハハッ」と笑顔で返事をしてくれました。

身体はやせ細り、酸素吸入している姿であっても「死ぬまで生きる」と笑い飛ばした姿が忘れられません。

裏を見せ　表を見せて　散るもみじ

良寛和尚

真っ赤に染まる紅葉を手に、葉の裏側をまじまじと見る人などまずおりません。

この葉っぱの表を「生きること」、裏を「死ぬこと」と捉えたとき、私たちは誰しもが生きる死ぬ背中合わせの人生を送っているのだという事に気が付きます。

私どもはこれを生死（しょうじ）と読みます。

「生死即涅槃（しょうじすなわちねはん）」…生死がそのまま涅槃（悟り、煩悩からの解放）である、という言葉があります。

喜びも、悲しみも、全てありのまま受け入れて生きるとき、自らの胸に手を当てますと、熱い鼓動に生きている喜びを実感します。

生死背中合わせの人生、これを最後の時まで笑顔で味わい尽くしたいものです。

発行者 / 宗教法人検校庵　〒 391-0003　長野県茅野市本町西 13-17　発行責任者 / 鈴木恵道　編集責任者 / 藤田清隆
お問い合わせ /TEL 0266-72-3058　https:// けんぎょうあん .com/　検校庵だより「日々是好日」第 10 号　令和 7 年 1 月 1 日発行